

理学療法 50 年のあゆみと展望—新たなる可能性への挑戦—わが国の理学療法の歴史と継承

3 理学療法 50 年の歩みと展望～新たなる可能性への挑戦～

¹⁾元 亀田メディカルセンター 継続学習センター，
²⁾千葉県立保健医療大学 非常勤講師 理学療法管理学，
³⁾山形県立保健医療大学 非常勤講師 理学療法管理運営論
渡辺 京子^{1,2,3)}

日本理学療法士協会設立 50 周年おめでとうございます。今回のテーマは非常に大きく、すでに第一線を退いた私が何を語ればいいのか悩ましいところです。上田敏著書：リハビリテーションの歩み(医学書院)に詳細に書かれていますので、私は清瀬の 1 期生として歩み始めた頃のおぼろげな記憶を辿り、さらにこの過ぎし 50 年間に感じたことなど皆様にお伝え出来ればと思います。

昭和 38 年(1963 年)3 月 1 日、高校卒業の日、偶然出会った方から、新設学校の受験を勧められました。初めて耳にした‘リハビリテーション’という響きは意味不明ながらも、未知の世界が待ち受けているような、胸のときめきを感じたことを覚えています。3 月 15-16 日、筆記試験と通訳付き面接を受け生まれて初めて聞いた外国人の生の英語、いつか自由に話せる日が来るかもしれない、内向きから外向きへ向かおうとする自分を予感しました。

3 月 25 日付合格通知、4 月 10 日付入学式案内、開校式兼入学式は 5 月 1 日と遅い波乱の幕開けとなりました。専門科目はガリ版

刷りの英語のプリントを渡され頻繁に試験がありました。今日の世界のグローバル化や国際化など知る由もなく、ひたすら英和辞典を片手に外国人講師の授業についていくのが精一杯の毎日でした。

そして昭和 41 年(1966 年)卒業。当時、50 年後のことなど全く予想出来ませんでした。以降、時代と共に社会も人々の価値観も変容しました。我々の学生時代には無かったコピー機、パソコン、携帯、ネット検索など自由に駆使できる IT 時代になり教育ツールが格段に向上しました。

臨床の現場ではスタッフが増えるにつれ必然的に部門の管理運営、職員教育、医療環境の変化や、患者の権利意識の高まりなどにより医療の質が求められるようになり、これらに対応するノウハウを手探りで経験することになりました。協会の歩みと共に私も理学療法士として成長できました、この 50 年を振り返りながら次の 50 年への提言が出来ればと思います。

理学療法 50 年のあゆみと展望—新たなる可能性への挑戦—わが国の理学療法の歴史と継承

4 理学療法における臨床と研究の有機的融合に向けて

信州大学 木村 貞治

わが国の理学療法の歩みは、今年で半世紀を迎えるに至った。この半世紀の前半は、様々な症例における臨床的特性と、それに対する理学療法の介入結果との関連性から帰納的に推論された経験則が、臨床判断の根拠の 1 つとして活用されてきたものと思われる。その後、経験則の中に内包される可能性のあるバイアスをできるだけ少なくして、中立的で科学的な臨床判断を行うための行動指針として「根拠に基づく医療(EBM)」の重要性が提言され、わが国の理学療法においても「根拠に基づく理学療法(EBPT)」として啓発活動が行われてきた。EBPT の真骨頂は、①臨床研究の結果であるエビデンス、②理学療法士の臨床能力や中立的な経験則、③施設の設定や環境、④対象者の意向や価値観、を統合した臨床判断に基づいて、安全で効果的な理学療法を提供することにある。

EBPT を実践するためには、対象者に即したエビデンスを読み解き、臨床判断に「つかう」ための「研究法」に関する基本的な理

解力が必要となる。「研究法」の理解に基づく論理的な思考は、中立的で科学的な理学療法を展開するための文脈ともなる。一方、わが国の制度、文化、風土の下で行われた理学療法のエビデンスは、非常に少ないのが現状である。そこで、エビデンスを「つくる」ための質の高い臨床研究の実践と、それらの研究成果を多忙な臨床現場で効率よくつかえるように、社会に「つたえる」ための組織的な取り組みの両方が重要な課題となる。

今後、人口動態の変遷が予測される中で、予防・治療・生活に視座を据えた安全で効果的な理学療法を中立性・科学性をもって実践し、その概念的枠組みと成果を社会に明示化していくためには、エビデンスを「つくる」、「つたえる」、「つかう」というサイクルの循環の軸となる「臨床と研究の有機的融合」に向けて、個人として、組織として、真摯に取り組んでいくことが、次の半世紀に向けての確かな道標になると考える。